子育てかわら版 第22号

園長だより１４３号復刻

過去の園長だよりです

平成２０年５月２日発行

《年齢に応じた発達課題があるⅡ》
九州大谷短大山田真理子先生の意見を取り入れながら

１歳児の発達課題

1歳になると2本足で立って歩けるようになることから、行動範囲が急激に広がります。その結果、新しい発見が増えます。そして、発見に感動し、それを身近な人に訴えていきます。もちろんまだ言葉を知りませんから会話は成立しませんが、子供の感動を汲み取って一緒に感動してくれる人すなわち保護者に伝えようとします。自分の喜びを分かってくれて一緒に喜んでくれる人がいることが嬉しいと感じる力を持って生まれてきていることは素晴らしいことだと思います。そして伝えた相手から期待したような共感、賞賛などが得られると更に次の発見へと関心が広がります。これが好奇心の始まりです。その感動に親が共感のみならず、反応しなければ、子供は自分の感動を伝えようとしなくなります。それどころか、伝える相手がいないことが分ると、感動しなくなり、更には発見すらしようとしなくなると言われています。

好奇心は知能の発達の始まりです。知能の高い子に育てようと思って小学校入学が迫って来てから塾に行かせたり、知識を教えたりしてもすでに遅いということが分ると思います。3歳までに育てるべき事を育てておかなければ、知能の発達もコミュニケーションの発達も社会性や自立の発達も叶わないことです。

142号のカキ養殖業者のように結果が出るまでに10年も15年もかかるのばかりでなく、子育ての結果はもっと早く出て来る事は沢山ありますが、やはり乳幼児期に育てた本当の結果が現れるのは思春期以降です。

人間の発達はその年齢にはその年齢の時に最も育ちやすい発達課題が決まっています。乳幼児期にこつこつとやるべきことを積み上げていくから、思春期に花が咲くのです。その日を夢見て今やるべき子育てを確実にしていきましょう。そして、育て忘れがあったら、今すぐ育て直しをしましょう。

２歳児の発達課題

2歳児になると運動能力は飛躍的に発達します。そして1歳児の時と違う事は自分の運動能力を使って自分がどれくらい出来るのかを調べながら世の中を確かめようとすることです。1歳までは歩くのがやっとだったのが走れるようになり、ちょっとした段差を跳び降りる事が出来たり、手の届かなかった所に届いたりするわけですから、1歳までの視覚的に発見する事から、自分はどれくらい走れるのか、斜面を登る事はどれくらい大変な事なのか、引っ張ったらどうなるか、押したらどうなるか、ぶつかったらどれくらい痛いのか、どれくらいの重さのものを持てるのかなど、自分の能力を試しながら世界を確かめているのです。自分の能力が発達するとそれを使ってみたくなり、今まで出来なかったことが出来るようになることが分かることが成長の喜びですから、子供は盛んにいろいろなことをやろうとします。悪戯が盛んになるのもこの頃ですが、子供は悪戯をしているのではなく、自分の力を確かめているのです。自分が生まれてきたこの世の中で、自分の身体を精一杯使って生きていこうとしているのです。ですからこの時期は走って転んで、ぶつかって、泣いてということを沢山するわけです。したがって、子供には出来るだけ体を動かす事をさせるべきです。壁にいたずら書きをするようになったということは、クレヨンなどの道具を使い、自分の手を使って世界を確かめようとしているわけですから、壁ではなく紙に書く事を教え、落書き帳を与える事が大事になってくるのです。この時期にじっとさせることを要求すると自発性、積極性の萌芽の時期を失うことになりかねません。